

マルクス 資本主義と社会主義

カール・マルクス（1818~1883）は、資本主義がもたらす社会矛盾をみすえながら、『共産党宣言』（1848）において共産主義（コミュニズム）への実践的方向を示し、『資本論』（第1巻は1867）において貨幣が資本へと転化し「自己増殖」を遂げていく過程を分析した。ソ連邦崩壊（1991）によって注目が弱くなったが、今日の世界恐慌のなかで資本の論理を解明した業績は、あらためて再評価されている。

マルクス 資本主義と社会主義 （文責：岩崎）

1818年にドイツで生まれたマルクスは、青年ジャーナリストとして活動し、当時のプロイセン国家に対する批判活動を展開した。パリへ移り、さらにロンドンに亡命しながら、ヨーロッパの資本主義の形成と政治変動をジャーナリスト、経済学者、思想家として考察し、後世に最も大きな影響を与えた人の一人となった。

ここでは、彼とエンゲルスの「共産主義」「社会主義」の考え方の変遷を見てみます。

＜イデー的、ユートピア的「共産主義」から科学的「社会主義」への概念の彫琢＞

マルクス、エンゲルスは「共産主義」と「社会主義」どのように使ってきたのでしょうか。それを時期的に追うと、「共産主義」から「社会主義」へと概念が彫琢されていく過程が浮かび上がってきます。

①『経済学・哲学草稿』（1844）「私的所有と共産主義」

「人間の自己疎外としての私的所有の積極的な止揚としての共産主義。それゆえに、人間による、人間にとっての、人間の本質の現実的な獲得としての共産主義。」

「社会主義的人間にとってはいわゆる世界史全体が、人間的労働による人間の産出、人間にとっての自然の生成よりほかのなにものでもないのであるから、彼は自分自身による自分の発生過程についての、直観的なあらがえない証明をもっているわけである。…共産主義はすぐ次の未来の必然的な姿であり、エネルギーな原理である。しかし共産主義はそのようなものとしては、人間的発展のゴール—人間的な社会の姿ではない。」

「共産主義」も「社会主義」も同義できわめて観念的な規定となっています。ヘーゲルやフォイエルバッハの影響が強く残っています。

②『ドイツ・イデオロギー』（1845~47）

ここでは、分業＝私的所有の否定としての、共産主義のユートピア的な姿が述べられています。

「共産主義社会では、各人は一つの排他的な活動領域をもたず、任意の各部門で自己形成を遂げることができるのであるが、共産主義社会においては社会が生産の全般を規制しており、…私は今日はこれを、明日はあれをし、朝は狩をし、午後には漁をし、夕方には家畜を追い、そして食後には批判する—狩師、漁夫、牧夫あるいは批判家になることなく、私

の気の赴くままにそうすることができるようになるのである。」(広松訳版、34)

と同時に、次のように、共産主義は来るべき社会を表すものではなく、現実的な運動のことである、と言っています。

「共産主義というのは、僕らにとって、創出さるべき一つの状態、それに則って現実が正されるべき一つの理想ではない。僕らが共産主義と呼ぶのは現実的な運動、現在の状態を止揚する現実的な運動だ。この運動の条件は今日現存する前提から生じる。」(同上、37)

この二つのとらえ方がセットになっているところに、共産主義の固有の特徴があり、これがそのまま現代の誠実な коммуニストの理解に継承されているように思われます。

③『共産党宣言』(1848)

「共産主義の特徴は、所有一般を廃止することではなくて、ブルジョワ的な私的所有を廃止することである。しかし、近代のブルジョワ的な私的所有は、階級対立にもとづく、一部の人間による他の人間の搾取にもとづく、生産物の生産と取得の最後の、そしてもっとも完全な表現である。」(全集、488)

「プロレタリアートは、ブルジョワジーに対する闘争のなかで必然的に結合して階級を作り、革命をつうじて自ら支配階級となり、そして古い生産諸関係を強力的に廃止するとしても、他方では、彼らはこの古い生産諸関係とともに階級対立の存立条件、階級一般の存立条件を廃止し、それによってまた階級としての自分自身の支配をも廃止する。」(495)

ここでは、「現実的な運動」としての「共産主義」が一つの形となって表され、資本主義の否定の具体的テーゼも打ち出されています。しかし、「共産党」と訳されているものは「共産主義同盟」「共産主義派」とでも言うもので、今日我々がイメージするような政党ではありませんし、テーゼも現実的に十分練られたものではありません。ここに盛られたテーゼがロシア革命などでそのまま機械的に適用され大きな問題が惹起されたとも考えられます。

④『資本論』第1巻(1867年) 第7篇「資本の蓄積過程」 第24章「いわゆる本源的蓄積」

「資本主義的生産様式から生まれる資本主義的取得様式は、したがって資本主義的私有も、自分の労働にもとづく個人的な私的所有の第1の否定である。しかし、資本主義的生産は、一つの自然過程の必然性をもって、それ自身の否定を生み出す。それは否定の否定である。この否定は、私有を再建しないが、しかし、資本主義時代の成果を基礎とする個人的所有をつくりだす。すなわち、協業と土地の共有と労働そのものによって生産される生産手段の共有とを基礎とする個人的所有をつくりだすのである。」

近代の出発点は、「自分の労働にもとづく個人的な私的所有」です。自分が働くことで何らかの生産手段を持ち、生活していくという、「自立した近代市民」が設定されています。他人の労働を支配し搾取することは想定されていません。しかし、生産手段を持っている市民は限られた有産者(ブルジョワ)のみです。多くの無産者は賃労働者として雇われ、工場で働かされ、資本主義が展開します。「資本主義的私有」は賃労働の搾取において増殖していきます。それが我々の生きているこの資本主義社会です。しかしそれは、「否定の否

定」の弁証法によって、「協業と生産手段の共有にもとづく個人的所有」へと転換されます。それが、協同組合社会であり社会主義なのです。ここで言う「個人的所有」は私的所有ではなく、「労働に基づいてその成果を自分たちの生活に使用する」という意味を持っています。

⑤『ゴータ綱領批判』（1875）

「資本主義から生まれたばかりの共産主義」（「第1段階」）

「ここでは平等な権利は、まだやはりブルジョワ的権利である。」（全集、20-21）

これをまだ「社会主義」とは規定していません。

「共産主義社会のより高度の段階で、...労働そのものが第1の生命欲求となったのち、...協同的富の豊かに湧き出るようになったのち、各人はその能力に応じて、各人にはその必要に応じて！」

⑥『空想から科学へ』（1880、エンゲルス）

マルクスは1880年のフランス語版の序文で「これはおそらく科学的社会主義の入門書となるであろう」と言っている。1892年の英語版序文でエンゲルスは「今回の英語版をくわえればこの小さな本は10カ国語で普及することになる。他のどんな社会主義の著作でも、1848年のわれわれの『共産党宣言』やマルクスの『資本論』でさえも、私の知る限りでは、こんなにたびたび翻訳されたことはないであろう。ドイツではそれは4版をかさね、全部で2万部になっている」と。ここには、時代を経る中で社会的に成熟した「社会主義」概念の確立と普及がうかがえます。

「プロレタリア運動の理論的表現である科学的社会主義」（末尾）

「社会的生産手段を公共の財産に転化する。...あらかじめ決定された計画による社会的生産が可能になる。」

「社会的生産の無政府状態が消滅するにつれて、国家の政治的権威もまた眠り込む。人間は、ついに...自分たち自身の主人になる。すなわち自由になる。」

「これは、必然の国から自由の国への人類の飛躍である。」

うしろ2つの引用は、これまで「共産主義のより高度な段階」といわれている事態の説明ですが、これについて「これが共産主義である」などとは言っていません。そもそも「国家の政治的権威も眠り込む」という、長い時間を要する社会の自己成熟にかかわる過程がとらえられているのです。これを人為的な「主義」の名においてとらえること自体が概念把握として誤りであると思われます。そういう意味で、マルクス、エンゲルスは「共産主義」という概念を止揚し、「社会主義」を科学的に提出する地点にまで到達した、と我々は理解すべきでしょう。

『資本論』では、「資本主義的生産は、...一つの自然過程の必然性をもって...、協業と土地の共有と労働そのものによって生産される生産手段の共有とを基礎とする個人的所有をつくりだす」と言っています。この「自然過程の必然性」を自覚的に意識し、それを科学的、合理的に推し進めるものが社会主義なのです。「再建する」ものは「個人的所有」すな

わち、搾取と疎外のない自己労働にもとづく十分な生活財なのです。「能力に応じて働き、労働に応じて受け取る」という原理もそのことを表現しています。

これらの原理は、人々の能力と労働成果の個人差を未だ前提としています。そういう意味で、それは、近代の「個人」とその権利（民主主義）を基礎にしていると同時に、「ブルジョワ民主主義」の制約から解放し、人民の民主主義（people's democracy）へと発展させていくことを目的としています。それは、資本の手段を選ばぬ利潤追求活動を制限しながら、人々の豊かな生活と自然のエコロジー保全を両方共に実現していく道であります。

それに対して、共産主義を「能力に応じて働き、必要に応じて受け取る」（『ゴータ綱領批判』）という原理において理解すると、それはきわめてユートピア的であることがわかります。このような原理が現実に見られるのは、近代社会では家族だけです。ですから将来の世界において、人類が一つの家族のようになったとき、その原理は現実のものになると言えるでしょう。しかし、国家も階級も消滅し、人類が一つ家族のようになる社会をわれわれは具体的に描くことができません。そもそもそういう社会が到来するかどうかもわからないのです。

以上、マルクス、エンゲルス、そしてわれわれの知見は、「社会主義」をこそ資本主義社会変革の思想と理論にすべきことを教えています。